



# 楨智雄

—「自由と規律」の

リベラリスト—

白梅学園短期大学  
福祉援助学科教授

山路 憲夫

白梅学園の教育には多彩な人々が関わった。功なり名遂げた碩学者や著名人もいた。

慶大教授、初代防衛大学校校長を経て、白梅短大校長に就任した楨智雄もその一人だった。

1965年3月、学長野口明が東京都杉並区から小平市（現在地）への移転という大事業を終え退任した後、学園から強く乞われての就任だった。

後に学長となった田中未来は「教職員も学生も長い間待ち望んでいた学長のお出でを心から喜びました」と学園の

当時の雰囲気を書いた（楨の実——楨智雄先生追悼集）。それほど楨智雄と白梅学園とのつながりは長く、深かった。白梅学園は1953年学校法人として認可されたが、それまでの道のりは平坦ではなかった。

白梅短大の前身東京家庭学園は、戦前設立されたが、戦後生徒数は減り続け、1950年当時は生徒わずか10数人程度の塾のような存在だった。その時、楨は「この学園はどこか見所がある」と理事を引き受けた。

名を連ねただけの名譽職ではなかった。生徒数が減り、経

宮難に陥っていた学園を建て直そうと多角化に乗り出した。

その一つが、榎智雄が提唱した「白梅英語教室」だった。文字に頼らず口から耳に伝えるオーラル・メソッドという教授法によって、子どもから大人まで集めて本場イギリス仕込みのキングズ・イングリッシュを丁寧に教えた。

ボランティアで学園再建に力を貸し、生徒たちを山中湖の別荘に招いた。損得を超えた助力だった。

1952年防衛大学校長になってからも、節目の際には、求めに応じて助言した。短大の認可が下り、報告に訪れた田中未来に「教育の基は人です。学校が不況の時は誠意ある人しか集まりませんが、少し発展しかけると俗人が集まります。人選には注意しなさい」とアドバイスをしました。

榎が学長に就任したのは長い関わりの中で培われた榎と白梅学園との関係から、自然の成り行きだったのだろう。

防衛大学校長として13年、責任の重い学長職から、ようやく解放されて間もないのにもかかわらず、榎が快諾したのも、白梅学園への深い愛着があったと推察される。

## 初代防衛大学校長の大任を果たす

智雄を含め榎一族は慶應義塾とのつながりが深い。祖父が越後長岡藩士だった時に北越戦争が起き、一家は転々とした後、大叔父も父武も慶應義塾に学び、福沢諭吉から直

接教えを受けた。

長男として生まれた智雄も慶應義塾普通部から入学、榎有恒（ヒマラヤのマナスル初登頂で知られる登山家）ら弟4人も慶應に学んだ。慶大理財科（現在の経済学部）を1914年に卒業、5年間慶應義塾からイギリスのオックスフォード大学に留学派遣され、政治学を学んだ。

榎は学問でも、ライフスタイルでも、リベラリズムを終生堅持した。慶應義塾で学んだ福沢諭吉の近代合理主義とこのイギリスでの5年間の経験が決定的に大きな影響を与えたのであろう。

帰国後、榎は慶大に戻り、法学部教授となり政治学、英憲法史などを教えた。41歳には慶大大学務担当理事となり、工学部（藤原工業大学）創設にもあたるなど大学経営にも腕を振るった。

慶應義塾での役割を終えた後、再び榎の出番がやってきた。初代防衛大学校長という難しい役割だった。

防衛大学が創設された1952年といえば、第二次大戦の悲惨な体験が未だ生々しい時期だった。自衛隊に対して、幹部を養成する防衛大学にも風当たりは強かった。

時の首相吉田茂は、友人の慶應義塾の小泉信三に人選を依頼した。小泉は塾長時代右腕として信頼した榎を選んだ。防衛大学の学長は、シビリアン・コントロールの原則か

らいつて軍人ではなく、防衛大学に強いシンを入れられる、国民から理解されるリベラルな学者こそが望ましい。熟慮の末、横を選んだ吉田と小泉にはそんな思いがあったと思われる。

その期待に横は十分に応えた、というべきだろう。

第1期生を迎えた入校式で横は「任務に偏する事なき均衡のとれた人」「民主制度に対して的確な理解をすること」、この二つを新人生に要望した。

さらに、高い身分には義務が伴う「Nobles oblige」というフランスの言葉を引用して公共に奉仕する義務と徳を求めた。

「自由と規律」というイギリスに根付くりベラリズムの伝統も機会ある毎に語った。

13年後退官するまで、横はこうした考えを繰り返し訴え続け、横イズムを浸透させた。

防衛大学が設立されて5年後の1957年の末、「ダンス事件」が起きた。防衛大学のダンス同好会が東京ステーションホテルを会場にダンスパーティーを開いたところ、当時参議院議員をしていた辻政信（元・帝国陸軍参謀）が乗り込んできて「防大生がこんなパーティーを開くのは何事か」と抗議、国会でも取り上げた。横は国会の参考人として出席「ダンスは立派な社交を教えるためにも是非必要

なことだ」と応じなかった。

普段は物柔らかだが、理不尽な言い分には決して応じない、リベラリスト横の真骨頂を物語る事件だった。

13年間の防衛大学校長は、内外からの目にさらされ、1日たりとも気をゆるめられない日々だったに違いない。退官後は悠々自適をと周囲は願ったが、横は白梅短大学長を引き受け、大学改革にも取り組んだ。

その一つは教養科の新設だった。一つの専門分野に進む前に人間としての総合的な教養を身につけさせる、その必要を訴え、設立に向け熱意をもって取り組んだ。

その設立の過程で文部省に出向いた際、文部省大学設置審議会をしていた慶応での横の後輩が「横先生ほの方が、短大にそんなに力を入れなくとも」と発言。横は「私は白梅学園に誇りを持っているのに、何事か」と怒ったという。

横の熱意もあって、既存の保育科、心理技術科に加え、教養科が設立され、1966年4月から学生が入学した。

付属の白梅幼稚園の園長も兼務、横にとっては最後の年となった1968年の春、園児たちから「えんちようせんせいとけっこんするの」と花束を贈られ、「ようやく幼児の話にも慣れてきた」と心から喜んだ。

その年の4月、理事会と教授会は横を二期目も引き続き学長として指名したが、その半年後の10月、ポリープの手

術の際、麻酔の副作用で死亡した。76歳だった。  
白梅学園という所を得て、まだまだ力を尽くそうとした  
半ばでの死を皆が惜しんだ。

(敬称略)

### 【参考文献】

『楨の実——楨智雄先生追悼集』（一九七二年）

（防衛大学同窓会内楨智雄先生追想集編纂委員会）

『白梅学園短期大学創立25周年記念誌』（一九八二年）

（白梅学園短期大学）

『防衛の努め』（一九六五年）

（楨智雄著、甲陽書房）

『米・英・仏士官学校歴訪の旅』（一九六九年）

（楨智雄著、甲陽書房）

終り